

企画名： 「いわき市に生きるジャーナリストから見た震災・原発・・・そして今」
実施日時： 2012年1月15日（日）
実施場所： パシフィコ横浜会議センター 3F 311+312
登壇者： 神田香織（講師/NPO法人ふくしま支援・人と文化ネットワーク理事長）
鏡 織鏡（外神田一門/NPO法人ふくしま支援・人と文化ネットワーク会員）
安竜昌弘（日々の新聞社編集人）
参加人数： 約140名
文責： 郡司真弓（NPO法人ふくしま支援・人と文化ネットワーク）

1. 企画の目的

- ①いわきを含む福島の実況をローカルのジャーナリストの立場から報告し、多くの人たちと共有すること。
- ②情報の受け手は同時に発信者であるという市民メディアの基本となる「語り部＝講談」という手法を多くの人に知ってもらうこと。

2. プログラム

1部：社会派講談「冬のカイダン」

2部：テーマ「いわきに生きるジャーナリストから見た審査、原発・・・そして今」

報告者は、いわき市で日々の新聞を発行しているジャーナリストの安竜昌弘さん。

質疑応答、お知らせなど

3. 内容

<1部> 昔、ジャーナリストであったという講談についての説明と、脱原発の創作講談を演じました。笑いの中にも原発問題、さらに新たなエネルギーにも触れた創作講談には多くの参加者が胸に響きました。感想も多くの方々から評価を得ることが出来ました。

<2部> いわき市で月2回発行している「日々の新聞」の編集長である安竜昌弘さんによる報告会を開催しました。地域で暮らすジャーナリストの眼からみた福島の実況と今後についての内容でしたが、その中で福島と他県との温度差、震災前に戻るのではなく震災の年からスタートする意識（震災元年）、長期化に伴い複雑化する福島、行政（県）と市民との乖離などについて報告がありました。

参加者は立ち見が出るくらい多くの市民が参加されました。想像を超える多くの参加者は、当事者であり、さらにジャーナリストという立場からの声が聞きたい、という意志の表れであったと考えます。参加者の中に福島の川内村から避難してきた方もあり、その方からの報告は安竜さんの報告に加えてさらに福島の実況を認識することができました。

質疑応答の時間を多く取ることが出来たので、「福島の人には聞きにくいですが・・・」「一度、福島の人に聞いてみたかった・・・」など、原発事故後、市民が一人ひとり悶々としていた思いを、この場で質問して解決できたことは、大変良い場になったと考えます。

4. 目的に対する達成

目的としていた事に対して、達成はできたと評価をしています。

安竜さんの攻撃的でなく、穏やかな話し方は多くの人々の心に沁み込みました。

この企画を実施し、当団体への関心も高めることができ、また安竜さんの「日々の新聞」の購読者の増加にも結び付いたことは、大きな評価と考えます。福島の人たちの生の声を首都圏に繋げる重要性を認識いたしました。

